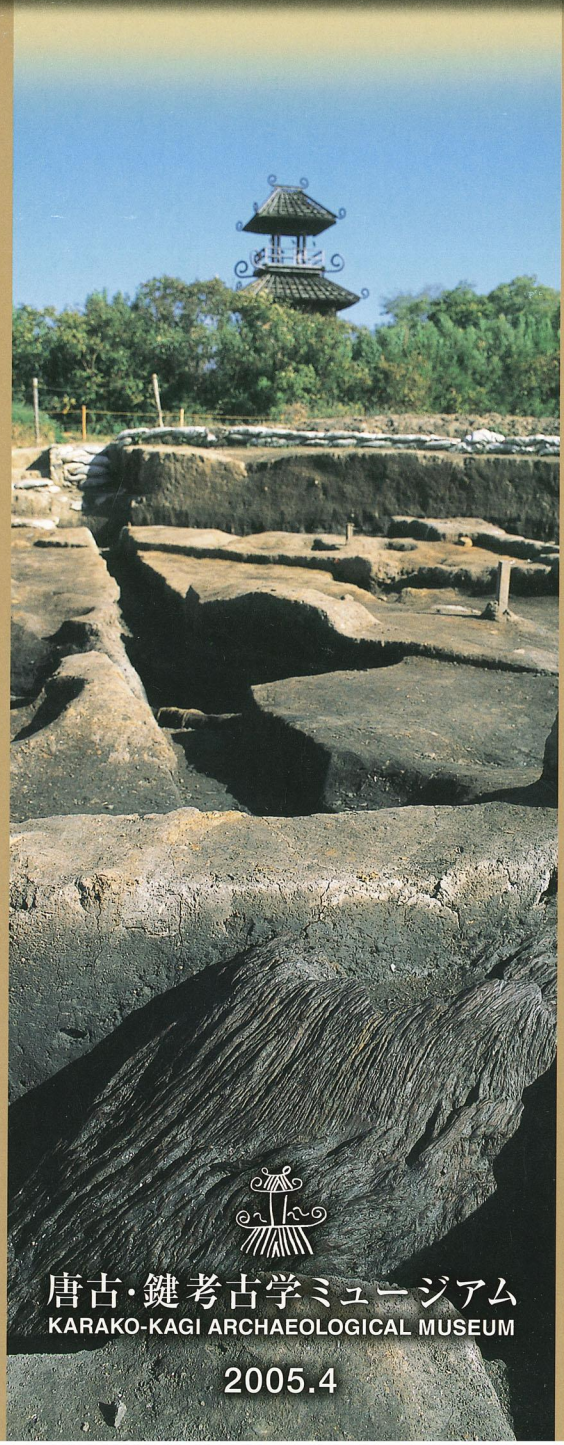
企画展

KARAKO-KAGI
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM
Volume 1

# たわらもと2005発掘速報展

Excavation of Site in Tawaramoto Town 2005



唐古・鍵遺跡
Karako-Kagi

保津・宮古遺跡
Hotsu-Miyako

黒田遺跡
Kuroda

笹鉾山1号墳
Sasahokoyama tomb No.1

日光寺推定地
Nikkouji

阪手仁王前遺跡
Sakate nioumae

十六面・薬王寺遺跡
Jurokusen-Yakuouji

寺内町遺跡
Jinaichou

唐古・鍵考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM
2005.4

## 保津・宮古遺跡　第31次調査

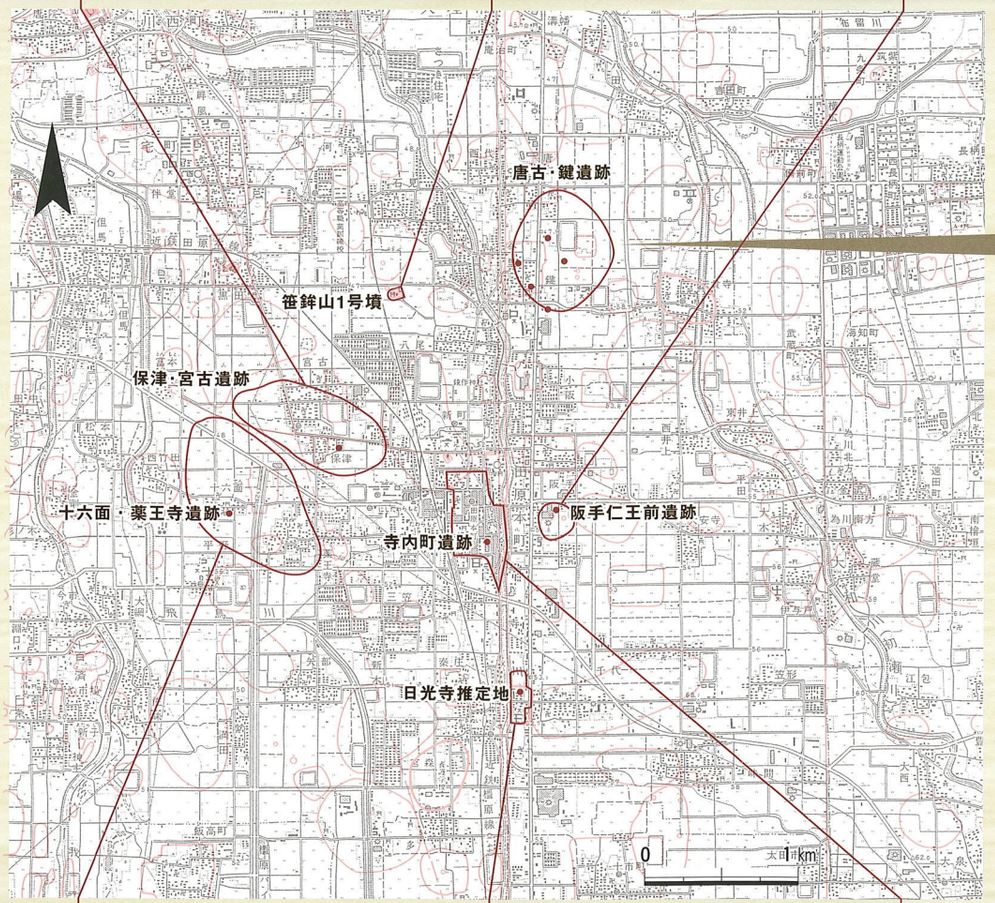
遺跡中央部の調査。弥生時代の穴や古代・中世の井戸などを検出した。弥生時代の穴は、前期前半のもので集落の成立を推定する上で重要である。また、古代・中世の遺構が現在の保津環濠集落の東側に展開していることも判明した。

## 笹鉾山1号墳　第4・5次調査

前方後円墳の規模・範囲を確認する調査。後円部南側と北側、前方部の南側で、二重周濠を確認した。周濠は、古代に埋没するが、この時期の土器や土馬、馬歯などが出土しており、この時期の祭祀が執り行われていたようである。

## 阪手仁王前遺跡　第1次調査

遺跡北端の調査。小字名から中世寺院の存在が推定される遺跡である。調査では、多量の瓦が出土し、寺院境内あるいは近接地であったことが判明した。調査区南端には12世紀前半の池状遺構があり、その北側では井戸を検出している。



## 十六面・薬王寺遺跡　第21次調査

遺跡南西部の調査。古墳時代の建物跡や古代の水田跡、中世の建物跡・井戸2基などを検出した。特に中世の井戸では、曲げ物容器を転用した井戸枠をもつものがある。これらの井戸からは瓦器、土師器小皿などが多量に出土した。また、墨書をもつ山茶碗（やまちゃわん）も存在する。

## 日光寺推定地　第4・5次調査

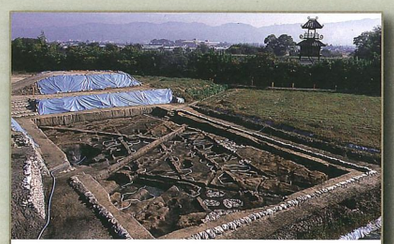
遺跡中央部の調査。小字名から中世寺院の存在が推定される遺跡である。12世紀後半の穴や溝、柱穴を検出した。穴からは、瓦器や白磁碗・小皿などが出土した。2つの調査区で検出した溝は、屋敷東と西を囲む溝と考えられる。

## 寺内町遺跡　第8次調査

遺跡南東部の調査。調査地の北側には楽田寺が存在しており、今回の調査では、中世の楽田寺関係と近世の町屋関係の遺構を検出した。特に、近世末の穴から出土した焙烙やその型、柱穴から出土した泥面子は多量にあり、それらの製作が推定される。

## 唐古・鍵遺跡　第94次調査

遺跡西端の調査。調査では、ムラを囲む弥生時代中期から古墳時代前期まで維持された環濠を検出した。環濠からは、各時期の土器とともに木製槽が出土した。このほか中・近世の建物跡や井戸も見つかっており、唐古南氏居館関係の遺構と考えられる。

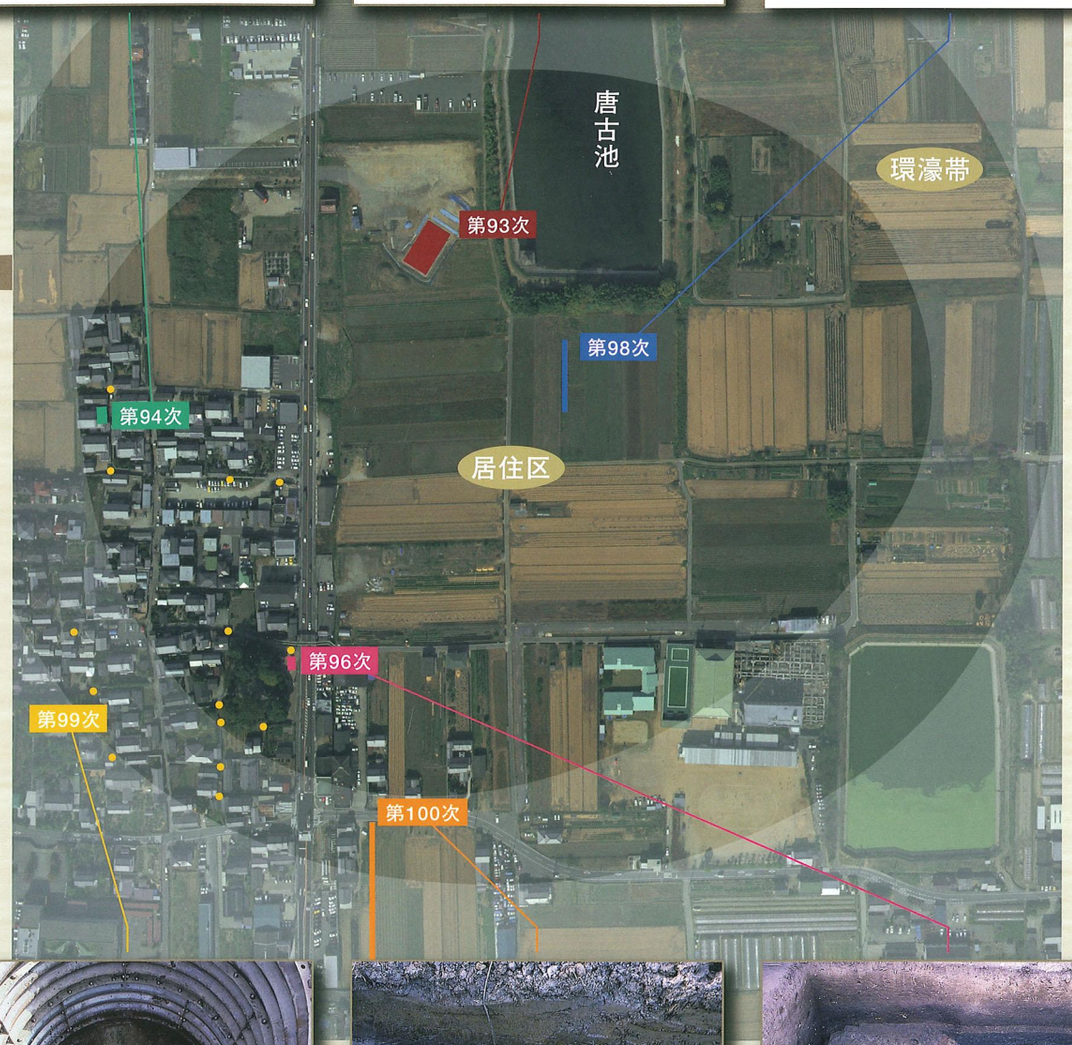


## 唐古・鍵遺跡　第93次調査

遺跡北西部の調査。3年間に及ぶ調査で、大型建物跡の全容が判明。このほか、弥生時代前期から古墳時代前期にわたる生活遺構を検出した。遺物では、打製石戈が装着された木製の柄や銅鐸形土製品、銅鏃など重要遺物が出土している。

## 唐古・鍵遺跡　第98次調査

遺跡中央部の調査。唐古池の南側にあたり、微低地と推定していたところである。調査では、弥生時代前期の木器貯蔵穴、中期の区画溝や竪穴住居の柱根などを検出した。また、遺物では、伊勢湾岸地域の条痕甕や玉砥石が出土している。



## 唐古・鍵遺跡　第99次調査

遺跡南西部の調査。鍵集落内での下水道立坑設置に伴う小規模な調査である。14ヶ所の調査区では、弥生時代と中近世の遺構を検出し、不明であった鍵集落内での遺構分布が把握できた。特に南西部の調査区では、多量の土器を含む弥生時代後期の環濠を検出している。

## 唐古・鍵遺跡　第100次調査

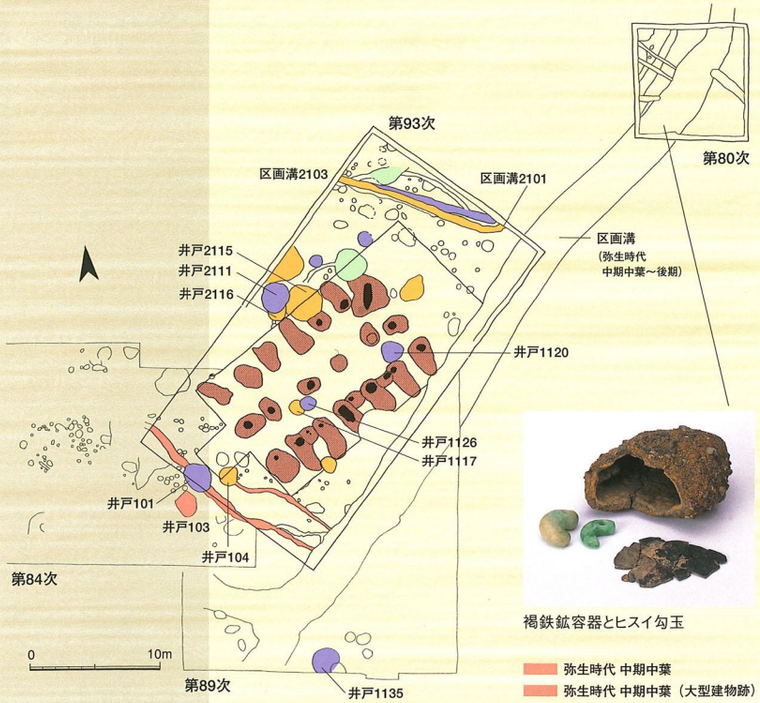
遺跡南限の調査。遺跡の範囲外を含む所の調査で、弥生時代の河跡や古墳時代前期・後期の溝や穴を検出した。唐古・鍵弥生集落の南側には、幅30m以上の河が存在することが明らかになった。古墳時代の遺構との関係は、今後の課題である。

## 唐古・鍵遺跡　第96次調査

遺跡南西部の調査。調査では、唐古南氏居館推定地あるいは南西に隣接する八阪神社に関係すると考えられる中世から近世の大溝や穴を検出した。これらの遺構に切られるように弥生時代前期・中期の区画溝や穴も見つかっている。

# 唐古・鍵遺跡2例目の大型建物跡

## ～弥生時代最大級の柱～　唐古・鍵遺跡　第93次調査






褐鉄鉱容器とヒスイ勾玉

弥生時代 中期中葉
弥生時代 中期中葉（大型建物跡）
弥生時代 中期後半
弥生時代 後期
古墳時代 初頭

大型建物跡の遺構平面図

### 2例目の大型建物跡は、3年に及ぶ調査で全容解明

2001年の第84次調査、2002年の第89次調査、2003年の第93次調査の3年にわたる調査で2例目の大型建物跡の全容が明らかになった。建物跡が立地する調査地は、遺跡北西部の微高地にあたる。本地の南東側には区画溝があって低くなっている。この区画溝の延長の第80次調査では、ヒスイ勾玉2点を納めた褐鉄鉱容器が出土している。また、微高地の北西側では竪穴住居群と環濠が巡る。

### 特殊な柱構造をもつ大型建物跡

この建物跡は、北東一南西方向に軸をもつ平面長方形で、梁間２間（６m）、桁行６間（13.2m）の規模である。独立棟持柱を持たないが、第74次調査例と同様に総柱形式という特徴を有している。この建物跡では、東側柱列の基本となる柱7本以外に3本の間柱が存在している。この間柱は、後から据えられていることから、建物が傷んだためにこのような構造になったと推定される。

この建物跡は、弥生時代中期中頃に属するもので、柱は、直径45～83cmのケヤキが使われていた。

基本柱（右）と間柱

### 第74次調査の大型建物跡

1999年の第74次調査で検出した大型建物跡は、唐古・鍵遺跡で初めて見つかったものである。南北棟で梁間２間（７m）、桁行５間以上（11.4m以上）の規模である。この建物跡は、弥生時代中期初頭に属するもので、独立棟持柱を有する総柱形式という特徴をもっていた。柱はケヤキの側柱３本とヤマグワの棟持柱１本が残っていたが、他の柱は抜き取られていた。ケヤキの柱は、直径60cmもある巨大なものである。この建物跡は、唐古・鍵ムラを大きく囲む大環濠が掘削される以前のもので、西地区の中枢的な施設と推定されている。

### 弥生時代最大級のケヤキ柱

この大型建物跡には、18本のケヤキ柱が残存していた。これらの柱のうち、最も太いのが北西隅のケヤキ柱である。残存長250cm、直径83.2cmを測り、年輪は110年分あった。

この柱の下部には、長辺25～40cm、短辺18～25cmの長方形の目渡穴（めどあな）が、二孔一対で2ヵ所に開けられていた。この目渡穴には、柱運搬時に使用したと考えられる10本前後の蔓が残存していた。

大型建物跡の柱穴から出土した土器（第93次調査）

目渡穴1の蔓

目渡穴2の蔓

北西隅柱とその底面

### 大型建物跡の年代

一般的に遺構の時期決定は、その遺構から出土した土器や検出遺構面、隣接あるいは重複（切り合い関係）する遺構で判断される。

今回の第93次調査で検出した大型建物跡の時期は、柱穴から出土した土器で決定した。柱穴から出土した土器は、弥生時代中期中頃、土器編年の型式としては、大和第Ⅲ-１様式である。

また、建物が解体される時期が大和第Ⅲ-２様式になる可能性がある。このことから大型建物跡は、数十年使用されていたのであろう。

# 唐古・鍵遺跡の出土遺物（1）

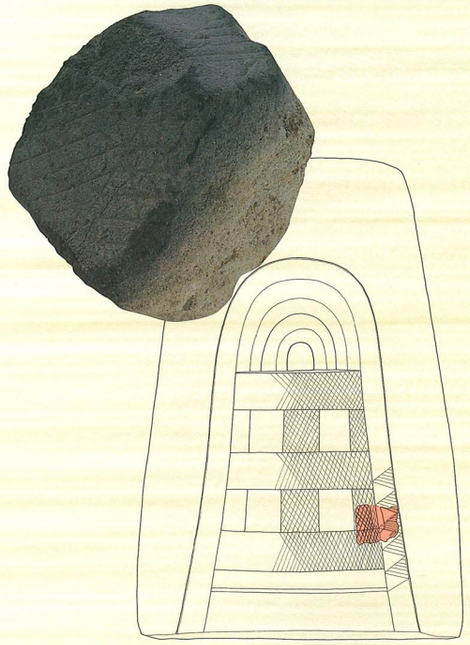
## ～銅鐸鋳型と銅鐸形土製品～　唐古・鍵遺跡　第93次調査

### 唐古・鍵遺跡の青銅器工房跡

唐古・鍵遺跡では、これまで遺跡東南部にあたる第3次・61次・65次調査地で、青銅器鋳造関係遺物が出土し、また、第65次調査では炉跡状遺構の検出から本地付近が青銅器の工房跡と推定してきた。この地区では、銅鐸の石製鋳型2点（同一個体）、土製鋳型外枠、送風管、高坏状土製品（取瓶）、鉱滓、銅鐸片など各種鋳造関係の遺物が揃っており、この地区での中期末から後期初頭の青銅器生産は確実であった。

### 唐古・鍵遺跡3例目の銅鐸の石製鋳型

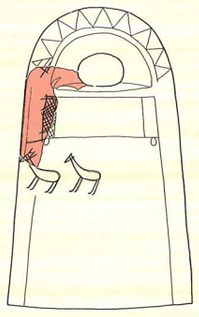
第93次調査において、銅鐸の石製鋳型が中世の農耕用の素掘り小溝から出土した。後世の遺物と混在する状況で出土したことから、本来の時期・出土地点は不明である。破片となった鋳型は、既に砥石に転用されており、わずかに鋳型面を残す程度である。鋳造された銅鐸は限定できないが、およそ40cm台の4区袈裟襷文銅鐸と推定される。この調査区では、これ以外の青銅器鋳造関連遺物は出土しておらず、青銅器の工房跡が本地にもあったかは疑わしい。



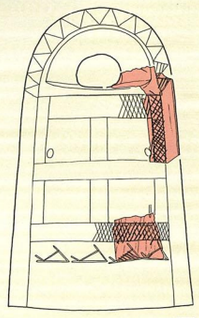
銅鐸の石製鋳型とその復元図（第93次調査）

### 鹿と魚の線刻をもつ銅鐸形土製品

銅鐸形土製品は、唐古・鍵遺跡からこれまで16例出土しているが、絵画を有するものは少ない。今回の銅鐸形土製品は、復元すれば約14cmの高さになるもので、銅鐸形土製品として大きい部類に入る。A面には横帯文の下に鹿が、B面には4区袈裟襷文の下に魚を線刻する。唐古・鍵ムラの工人が鋳造、あるいは保有していた銅鐸を模したのであろうか。



A面



B面

銅鐸形土製品とその復元図（第93次調査）



# 唐古・鍵遺跡の出土遺物（2）

## ～石器生産と各種石製品～　唐古・鍵遺跡　第93・97・98次調査

### 一括廃棄されたサヌカイトの屑（くず）

唐古・鍵遺跡では、これまでにサヌカイトの原石や石器製作ででた屑がまとまって出土している。

第93次調査においても、3～30mmのサヌカイト屑約10.7kgが穴に一括廃棄されていた。これほどまとまって出土した例はない。サヌカイト屑の一括廃棄は、集落の北地区に多くみられ、この地区で石器製作をおこなっていたことを示す資料である。

微細なサヌカイトの屑（第93次調査）

### まとまって出土した玉造りの道具

唐古・鍵遺跡における玉造りの実態はよく判っていない。これまでの玉造り関係の遺物は少なく、点在していた。

今回の第98次調査では、玉素材に擦りきり溝を入れ分割するための「石鋸（いしのこ）」や角柱の管玉（くだたま）を丸く管状に成形するための筋状の溝をもつ「玉砥石」がまとまって出土した。このことからこの周辺に玉造り集団の地区が想定される。

石鋸とその素材の紅簾片石（上段）、玉砥石（第98次調査）

### 石庖丁が多く出土するムラの中央部

石庖丁は、唐古・鍵遺跡でも比較的多く出土する遺物である。第98次調査でも38点の石庖丁や大形石庖丁が出土した。本調査区の西20mでおこなった第53次調査においても98点の石庖丁が出土しており、集落全体の中でこの中央部の出土比率は高い。このような量の多さが何を表しているのかは不明である。

結晶片岩製の石庖丁や紡錘車など（第93・97・98次調査）

# 唐古・鍵遺跡の出土遺物（3）

## ～絵画土器と特殊な文様～

唐古・鍵遺跡　第93・99次調査

### 盾と戈をもつ人物

弥生時代の絵画土器のなかに、「盾と戈をもつ人物」を描いたものがある。佐賀県川寄吉原遺跡の銅鐸形土製品、大阪府平野遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡（第１次調査）、清水風遺跡の絵画土器や奈良県石上２号銅鐸などにみられる。

特に清水風遺跡の絵画土器には、他に大型建物や魚、矢負いの鹿などが並列的な構成で描かれ、弥生のまつりを考察する上で重要な遺物になっている。このように時期や地域が異なりながらも共通する意匠を有している点は重要である。弥生時代のまつりの所作には、頭に羽飾りをつけた男が模擬戦を演じるような行為があったのだろう。

### 鹿と鳥の線刻の下絵に盾をもつ人物

唐古・鍵遺跡では、絵画土器が多く出土する。第93次調査でも壷の胴部に線刻をもつ破片が出土した。線刻は、細描きと太描きの2種があり、細描き線はナデ消されているが、消しもれた部分には「盾をもつ人物」が観察できる。その後、この細描き線の上に太いヘラで鹿と鳥を描き直している。

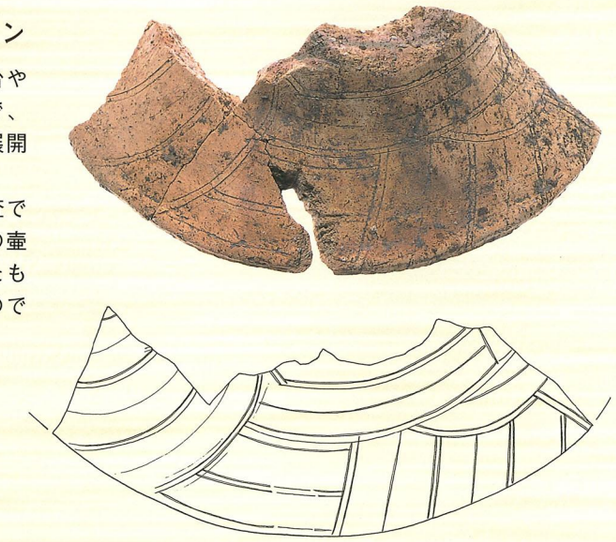
「盾をもつ人物」の全体は不明であるが、本来はもう一方に「戈」をもっていたのであろう。下絵と違う絵を描いた理由は不明であるが、この人物は、清水風遺跡の類例から祭祀を司る重要な人物であることは間違いない。

人・鹿・鳥が描かれた土器（第93次調査）

### 特殊な文様・弧帯文（こたいもん）風のデザイン

弥生時代後期、吉備地域の器台や石製品につけられた特殊な文様で、数条の弧線を組み合わせ帯状に展開している。

唐古・鍵遺跡では、第13次調査で出土した異形高坏や第14次調査の壷などにもみられる。今回出土したものは、高坏の脚部に描かれたものである。



弧帯文の描かれた高坏（第99次調査）



# 唐古・鍵遺跡の出土遺物（4）

## ～唐古・鍵に運ばれた土器～ ～井戸に供献された土器～

唐古・鍵遺跡　第93・98次調査

伊勢湾岸地域の甕（第98次調査）

### 全容がわかる伊勢湾岸地域の甕

唐古・鍵遺跡では、各地から運ばれてきた土器が多い。弥生時代中期初頭（ないけい）には、伊勢湾岸地域の壷や内傾口縁土器が多く、甕は少ない。今回出土した甕は、全体の形がわかるものとして重要である。

甕の外面は煤が付着して見にくいが、禾本科（かほんか）の植物茎を原体にした調整具（じょう）で土器表面をナデており、いわゆる「条痕（じょうこん）甕」と呼ばれるものである。

各地から運ばれてきた土器（左から瀬戸内、摂津、伊勢湾岸、河内、近江）（第98次調査）

### 清水確保のための祈り

井戸は、生活用水を確保するために欠かせない。唐古・鍵ムラでも多くの井戸が掘削された。井戸の多くは素掘りの井戸で、数年経てば埋没してしまう。その埋没過程で、たくさんの完全な形の土器を投棄している。これは、井戸の清水を使うことができたことの「水の神」への感謝のために供えられたのだろう。

井戸から出土した土器（第93次調査）

# 後円部の直径は32m

## ～盆地低地部で墳丘を残す前方後円墳～

**笹鉾山1号墳　第4・5次調査**

笹鉾山1号墳は、田原本町八尾に所在する。盆地低地部で墳丘が残る前方後円墳として貴重な存在である。これまでに5回の調査をおこない二重周濠を有する全長約97mの古墳であることが判明した。また、本墳の北西22mには馬と馬子の埴輪がセットで出土した円墳の2号墳が存在する。

### 第4次調査

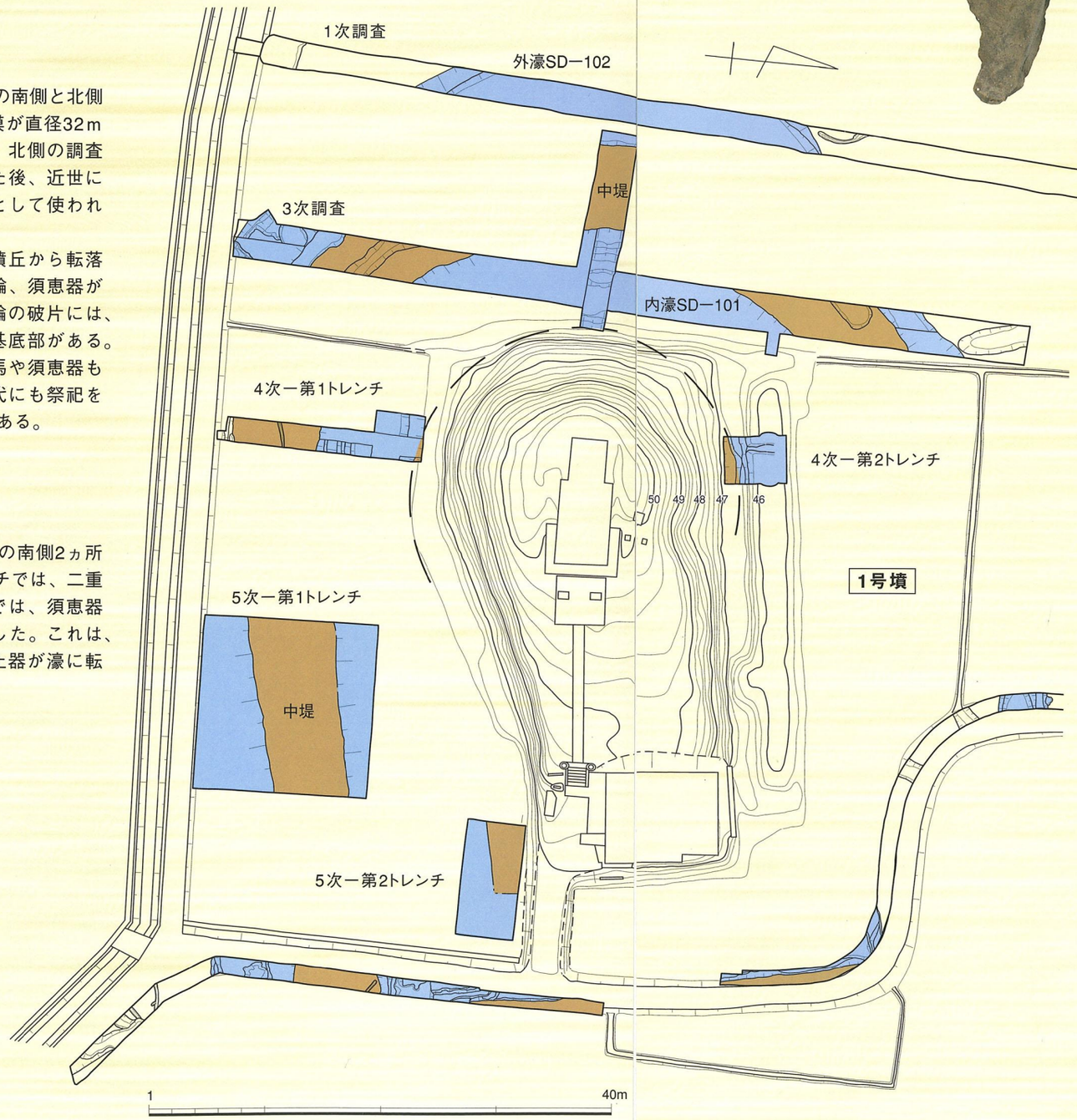
第4次調査は、後円部の南側と北側を調査し、後円部の規模が直径32mであることが判明した。北側の調査区では、内濠が埋没した後、近世に濠を掘りなおし、溜池として使われていたことが判明した。

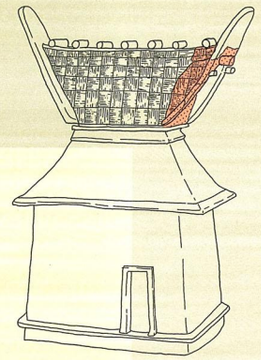
南側の調査区では、墳丘から転落した家形埴輪や円筒埴輪、須恵器が出土している。家形埴輪の破片には、切妻造りの屋根部分や基底部がある。

また、奈良時代の土馬や須恵器も出土しており、この時代にも祭祀をおこなっていた可能性がある。

### 第5次調査

第5次調査は、前方部の南側2ヵ所を調査した。第1トレンチでは、二重周濠を確認した。外濠では、須恵器の大甕と短頸壷が出土した。これは、外堤で古墳祭祀をした土器が濠に転落したものであろう。



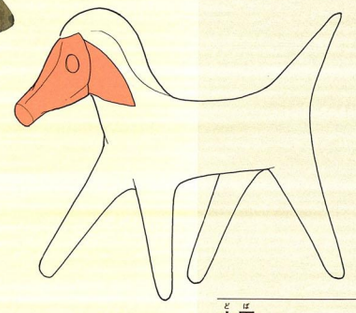


家形埴輪の屋根とその位置図

2号墳

家形埴輪の基底部

土馬（奈良時代）



須恵器の小壷（奈良時代）

**笹鉾山2号墳**

用水路整備に伴う発掘調査で、初めて明らかになった径約20mの円墳である。墳丘部分は、既に削平を受け、周濠部分のみが残存していた。南側の周濠からは、馬形埴輪や人物（馬子）埴輪のセット、円筒埴輪、盾形木製品、笠形木製品が出土した。特に馬と馬子の埴輪は、セットとしてわかる良好な資料である。

**土馬**

6世紀後半から10世紀初頭まで製作された土製の馬形である。古墳時代の土馬は、鞍や面繋を表現した飾り馬が多かったが、奈良時代には省略された表現になる。平城京や長岡京など古代都城遺跡から多く出土している。

生きた馬の「形代」として水神に供えるため、あるいは行疫神を他界に送り出すために作られたものと考えられている。

# 中世の館

十六面・薬王寺遺跡　第21次調査
保津・宮古遺跡　第31次調査

墨書土器（十六面・薬王寺遺跡）

田原本町には、平安時代から室町時代にかけての遺跡が多数存在している。これらの遺跡のなかには、小字名が「・・・垣内」や「・・・ヤシキ」など居館や集落があったことを推測させる地名を残すものや、条里制で整備された長方形の水田でなく矩形の畑地になっているところがある。中世文書から在地武士の存在が考えられ、これらの遺跡は、彼らの居館の可能性が高い。

## 十六面・薬王寺遺跡　第21次調査

十六面・薬王寺遺跡は、田原本町の西方、大字十六面と薬王寺にまたがる弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。それぞれの地区で、中心となる時代と性格が異なる。

今回の調査地は、十六面集落の南側にあたる。この付近では、以前に第5次調査を実施し、古墳時代や鎌倉時代の井戸を検出している。今回の調査でも同時代の遺構を検出しており、この時代の集落が推定できる。鎌倉時代の井戸は、曲げ物容器の底を抜いた枠を井戸枠として利用したもので、７段積上げたりっぱな井戸である。

瓦器埦・皿と土師器小皿（十六面・薬王寺遺跡）

## 保津・宮古遺跡　第31次調査

保津・宮古遺跡は、田原本町の西方、大字保津と宮古にまたがる縄文時代から近世までの複合遺跡である。

現在の保津集落は、「環濠集落」として有名であるが、この集落の形成がいつ頃から始まったのか、また、環濠がいつ掘削されたのかは、わかっていない。

第31次調査地は、保津環濠集落の外側にあたる東端で実施した。この調査では、平安時代から鎌倉時代の井戸が検出されており、環濠形成以前の集落が本地を含め、周辺に展開しているようである。

紅が付着した白磁皿と瓦器埦（保津・宮古遺跡）



# 中世寺院

日光寺推定地　第4・5次調査
阪手仁王前遺跡　第1次調査

田原本町には、小字名から寺院が存在したことを推測できる遺跡が多数存在している。今回、調査した日光寺推定地と阪手仁王前遺跡もそのひとつである。

## 日光寺推定地　第４・５次調査

日光寺推定地は、田原本町の南方、大字千代に所在する遺跡である。小字名には「日光寺」や「中殿」、「今堂」などの地名が残っていることから、中世寺院の存在が推定されている。

これまでに3回の調査を実施し、鎌倉時代から室町時代の溝や柱穴を検出した。

第4・５次調査では、寺院に付設する屋敷を囲む溝と推定される遺構を検出している。

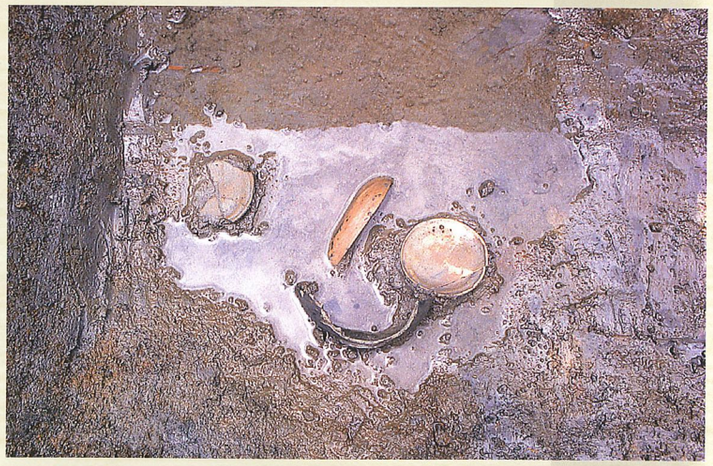
白磁碗・皿と瓦器埦・小皿、土師器小皿（日光寺推定地）

## 阪手仁王前遺跡　第1次調査

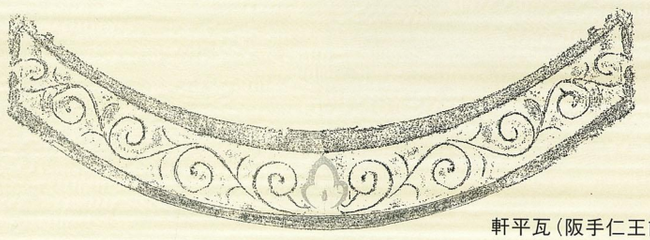
阪手仁王前遺跡は、阪手北集落と阪手南集落のほぼ中間に位置し、小字名には「仁王前」や「カワラド」の地名が残っており、これら地名から中世寺院の存在が推定されている。

本遺跡内には、阪手カハウト遺跡の墳墓地があり、発掘調査では中世の大溝や土壙墓、近世から近代にかけての民間信仰「クサガミサン」の祭祀跡を検出している。

阪手仁王前遺跡の調査としては、今回初めてで、柱穴や井戸、池状遺構を検出した。



瓦器埦と土師器小皿の出土状況（阪手仁王前遺跡）



軒平瓦（阪手仁王前遺跡）

# 近世町屋の焙烙づくり

## 寺内町遺跡　第８次調査

田原本寺内町は、1600年平野氏初代の長泰がこの田原本に教行寺を誘致し、経営させたことに始まる。しかし、2代目長勝は、この教行寺を退去させるとともに、陣屋の造営と教行寺の跡地に浄照寺と本誓寺をいれ、陣屋町を造ったとされる。

しかし、これまでの調査から、この寺内町遺跡では、鎌倉から室町時代の遺構を検出しており、当期の集落が存在していたことがわかっている。また、遺跡の南側には、『大乗院寺社雑事記』に記載される楽田寺があり、勢力を誇っていた。

今回の調査地は、この楽田寺の南側で、平安時代から室町時代の遺構遺物が検出され、楽田寺関係のものと推察される。また、19世紀代の柱穴や穴が検出されているが、これは楽田寺の衰退とともに町屋へと変化した遺構と考えられる。

焙烙の型

### 焙烙（ほうらく）と型が多量出土

焙烙は、近世において土鍋から変化したものである。土師質で浅い鍋の形態を呈する。底の部分は、厚さ２mm程度に薄く作られ、ゴマや豆・茶などの焙煎に使われた。

今回出土した焙烙は、煤の付着していない未使用のものが多数含まれており、製作後になんらかの原因で破損したものを一括廃棄したものであろう。

また、焙烙の型は、やや厚手の皿形を呈している。焙烙の底部分を型づくりするものである。内面には、製作時に付着した粘土が残ったままものがある。

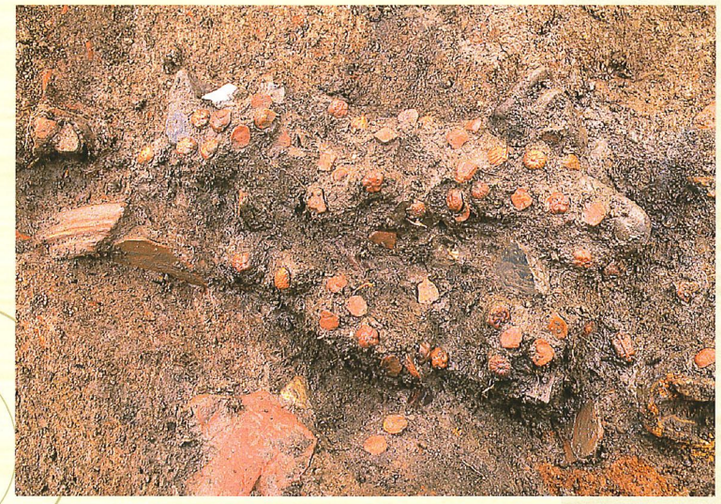
焙烙

### 泥面子（どろめんこ）もまとまって出土

泥面子は、銭を投げて当てる「意銭（ぜにうち）」という平安時代の遊びに系譜があるといわれているものである。江戸時代後期になると泥面子を用いた子供の遊びとして急速に発達した。

今回の第8次調査では、建物柱穴から泥面子190点が出土し、例のないものである。柱穴になぜ埋めたのかはわからない。

2cmまでの小さいもので、型に粘土を押し当てて抜いたもので、花・鮑（あわび）・宝珠（ほうじゅ）・小槌（こづち）・軍配（ぐんばい）・算盤（そろばん）・瓢箪（ひょうたん）・手桶などの意匠がある。梅花や菊花が多い。型で押し当てられた意匠の半対面は、平らで指の指紋が残っている。



泥面子の出土状況

さまざまな泥面子

保津・宮古遺跡

会期　2005年4月16日～5月22日

**企画展「たわらもと2005発掘速報展」**
**唐古・鍵考古学ミュージアム Vol.1**

発行日　2005年4月16日／編集　唐古・鍵考古学ミュージアム／発行　田原本町教育委員会
〒636-0315 奈良県磯城郡田原本町大字阪手233-1